

樽屋外伝 『幕末とショートケ 一キ』

保坂歩

今年も、ホワイトデーが近づいてきました。

春の訪れまでは後少し。

触れれば溶けるパウダースノーが、空を舞ってはケヤキの葉を濡らす――冬の残滓を肌を感じる、そんな平日の昼下がり。

このシーズンはクリスマスやバレンタインデーに次いでお菓子がたくさん売れる、ケーキ屋にとってはかき入れ時です。

私は両親が経営する商店街片隅のケーキ屋で、店員として働く、色気の無い二十歳の女です。

高校を卒業してからは、恋人の一人も出来たことはありません。

並んだケーキの出来映えも、この店構えも気に入っているので、しばらくは自分の恋に悩むのは後回しでいいかな、と思っています。

来客者も少なくなった閉店直前の夕方に、入り口のベルがからこると、慎ましい音を鳴らしました。

「えーと……ホワイトデーのお返して、どうなのがいいんでしょうか？」

所在無げに尋ねてきたのは、よく言えば可愛らしく中性的な外見ですが、妙に存在感が薄い――一言で言うと、フツー、の、高校生らしき男の子でした。

口ぶりから察するに、彼は女性にプレゼントを贈るのには慣れていないようでした。

「そうですねえ。定番はクッキーとかでしょうか。最近はマカロンなども喜ばれます。けれどもお返しの品に、こだわりすぎることはないですよ。お客様の感謝や愛情が籠もってさえいれば、きっと喜んでいただけます」

「あ、いや……愛情ってゆーか。義理チョコへのお返しなんですけど、去年は貰うときに怒らせちゃって。今年のお返しは、ちゃんとしてあげたいなって」

彼はもごもごと口ごもりながら、落ち着いた無き仕種で、私から目を逸らします。

――何かを隠している。

ケーキ屋店員の直感でした。

訳ありのプレゼント、というオーダーは決して珍しいものではありません。

そして訳がある方が――ほんの少し捻れた理由がある方が、相手にとっても自分にとっても、記憶に残るプレゼントに

成り得るのです。勝手な持論ですが。

「お返しをしたいお相手は、どのような方なんですか？」

「頭が良くて、口が回って、収入もあって、気が強くて、力も強くて、スタイル良くて、周りからの人気もある、美人の女子高生です」

.....人として完璧すぎます。

そんな女性が、実在するのでしょうか。

もしやその方は、貴方の想像上の彼女なのではーと、こちらから問い質すわけにもいきません。

私は陳列されたお菓子やケーキを彼に見せながら、一緒に選んであげることにしました。

「その方が、どんなお菓子をお好きなのかはわかりますか？」

「飴とかチョコとか、甘いものなら何でも好きみたいですけど」

「では、チョコレートケーキなどはいかがですか？ 当店では本格的なザッハトルテやフォンダン・オ・ショコラも置いてあります。どちらも当店のショコラティエの自信作ですから、ご満足いただけると思いますよ」

「ぎ、ザッハトルテ.....？ へえ、ケーキ詳しくないからなー.....」

うーんうーん、と唸りながら、彼は並んだケーキやお菓子に目移りしています。

なんとも優柔不断な性格のようですが、それだけ悩んでも喜ばせたい相手がいるというのは、微笑ましくも愛らしいものです。

「やっぱり、来須さんに付き合ってもらえば良かったかな.....？」

「来須さんという方が、お相手の方の名前ですか？」

何故か、胸が騒ぐ響きのあるお名前でした。

「ち、違います。このお店を紹介してくれた人です。甘い物なら、ここが間違いないって」

常連客の方でしょうか。

こんなに小さなお店を鼻眞にさせていただけるなんて、心からありがたく思います。

きっと心根が優しく、人当たりも良い方なのでしょう。勝手な妄想ですが。

「肝心の相手の名前は、その……僕の口からは言えません」

矢張り訳ありのようです。ドラマを感じます。

「では、キャラクターの絵などをケーキにデコレーションしましょうか。アニメキャラの絵で喜ぶ女性もおりますし」

「キャラクター……ですか？」

呟いた次の瞬間、彼の表情が輝きました。

穏やかなしじまの瞳に、自信に溢れた光が灯ります。

彼は『キャラクター』という言葉に、並々ならぬ思い入れと誇りがあるようです。

「そうか。好きなキャラクターから直接プレゼント貰えれば、誰でも嬉しいですね。なるほど」

「……？」

会話に、齟齬があるような気がしました。

「そういえば司馬遼太郎の本が好きとか、幕末が好きって言ってたな。衣装は家に無いけど……急いで帰って即興で作ればいいか」

ブツブツと彼は考え込みはじめました。

随分深い趣味の女子高生が相手のようです。属性が多すぎて、人物像が掴みきれません。

「じゃあえっと、それ、一つ下さい」

「え？ ええ、はい」

そして彼は何の変哲も無いチョコレートケーキを買って、とことこ歩いてご機嫌に帰っていきました。

狐につままれたような気分でしたが、私のアドバイスが彼の『訳』を満たしたようです。

ならばこれで――ここまでで、良いのです。

相手の方がプレゼントを受け取ってどう感じてくれるかまでは、私達ケーキ屋は見届けることが出来ません。

自分達のケーキに誇りを持ち、優しくてほんの少しピターなその甘さが、どなたかの強張った心をパウダースノーのように溶かして下さることを、ただただ祈る。

お菓子の力を信じてあげる――出来ることはそれだけなのです。

さて。

それからホワイトデー商戦も滞り無く過ぎ、数週間が経ちました。

寒さも和らいで日射しは幾分か暖かくなり、ブラン・マンジェも美味しくいただける時節です。

店番中に雑誌の『スイーツ特集』をぱらぱらめくって読んでいた私は、モデルとして活躍しているという女子高生、登美永花さんへのインタビュー記事を目に留めました。

『――最近、美味しかったスイーツはある？』

『登美永：たくさんあるんですけど、チョコレートケーキが美味しかったです。』

『――へえ、それは自分で購入したの？』

『登美永：いえ、友達が買ってきてくれました。』

『――それはまさか恋人だったり……？』

『登美永：まさかー。でも嬉しかったですよ。例えば、坂本龍馬本人から直接プレゼント渡されたら、喜ぶしかないですよね（笑）』

『――さ、坂本龍馬？』

『登美永：ええと、そういう夢を見たんです（笑） 司馬遼太郎先生の『竜馬がゆく』にはまってて――アハ、訳分かんなくてすみません。』

……本当に訳が分かりませんでした。なんだか、奇妙な温かみのある記事でした。

登美永花さんが不思議系キャラだったとは知りませんでしたけれど、彼女がその誰かからのプレゼントを喜んでいることは、短い言葉からでも伝わってきます。

芸能人でもある彼女が美味しいというのですから、それは当店のチョコレートケーキとは比較にならない程高価で手の掛かった、一流のショコラティエによるものなのでしょう。

ぜひ一度、いただいてみたいものです。その味を知れば私も、ちょっと訳ありのチョコレートを必死で誰かに、プレゼントしたくなるのかもしれませんが。

今の私はまだ、そのような『訳』とは縁遠いようですけど。

終わり